

オリーブ産業で栄える町 —後期青銅器時代～初期鉄器時代—

調査区ではこれまでに7基のオリーブ油を採取するための施設がみつまっている。C地区で1基、D地区で3基、E地区で2基、F地区で1基である。E地区では1基が隅丸方形だが、C・D地区は全て平面が円形である。遺構の年代はE地区のものは不明だが、他は後期青銅器時代から初期鉄器時代のものである。F地区の1基は長方形の石を削りぬいたものでペルシャ時代に降るとみられる。

C・D・E地区の施設は石を組み合わせたもので直径1.3～2.1mあり、上部がやや開く。底面は平らだが1方向に傾斜しており、最も低い部分には直径25～30cmの石製ボウルが設置されている。砕いたオリーブをボウルに集め、それを絞りオリーブ油を採取すると考えられている。このようなオリーブを砕く施設はイスラエル国内でも沢山みつまっているが、テル・レヘシュ遺跡は広い面積を発掘調査しているわけではないにもかかわらず、これまでに7基もみつまっているのは、この遺跡がオリーブ油を生産する拠点であった可能性が高いと考えられる（山内）。



D地区の大型建物（後期青銅器時代～鉄器時代I期）

C地区とD地区では、後期青銅器時代Ⅲ期（紀元前12世紀）から鉄器時代I期（紀元前1130-980年頃）への明確な連続性が確認されている。D地区では紀元前12世紀末に破壊され焼失した長方形の建造物（13m×8m）が検出され、その中央から円型のオリーブ搾油設備1基がほぼ完全な形で発見された。同一建造物の別の地点にも同様のオリーブ搾油設備が確認されている。また、その西側の部屋の床面からは後期青銅器時代後半の土器が出土しており、この地区の建造物自体は後期青銅器時代に建造され、鉄器時代I期に改装されて使用されたものとみられる（小野塚）。